

N24
1
100C1

創刊100周年

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

2001

12.12.25

1



第一巻第一号(明治34年創刊号)表紙

第100巻 第1号 日本幼稚園協会



※21世紀の保育のキーポイントが網羅され、保育のあるべき姿がわかる、これまでにない画期的なシリーズです。
 ※各分野の第一級の著者陣が「電車の中で読める！」をキャッチフレーズにやさしくわかりやすく解説してくれます。

21世紀保育ブックス①

新しい教育要領・保育指針のすべて

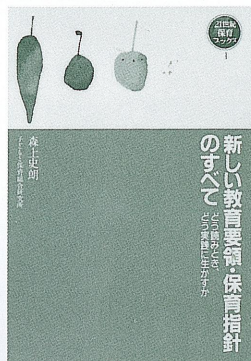
どう読みとき、どう実践に生かすか

最新刊

森上史朗／著

新教育要領・保育指針が4月から実施されていますが、現場の受けとめ方は必ずしも一様ではなく、多くの問題があることが指摘されています。新教育要領・保育指針を正しく認識し、保育者それぞれが実践へとつなげていくための考え方を提示しています。

B6判・184頁・定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス②

新時代の保育サービス

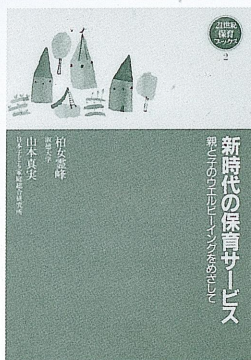
親と子のウェルビーイングをめざして

最新刊

柏女霊峰・山本真実／共著

時代の変化を受けて、保育サービス・保育所のあり方についても新しい方向性が模索されています。本書では、多岐にわたる視点から保育をめぐる現状や保育サービスの動向を捉え直し、今後の保育サービスのあるべき方向性について提言を試みています。

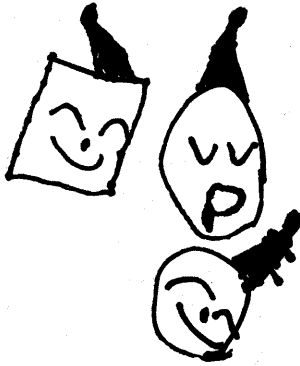
B6判・184頁・定価：本体1,200円＋税



キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第100巻 第1号



幼児の教育 目次

— 第一〇〇巻 第一号 —

© 2001
日本幼稚園協会

第一〇〇巻を迎えるにあたって 田代 和美 (4)

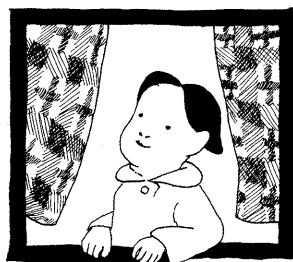
創刊一〇〇巻を記念して

私が『幼児の教育』誌の編集にたずさわった頃 津守 真 (8)

“共に生きる”ということ 榎田 正子 (19)

江東区子ども家庭支援センターの周辺 新澤 誠治 (25)

耳をすまして 目をこらして(10) 宮里 暁美 (32)



三歳児クラスの子どもたち

集団生活を始めたばかりの頃……………実松 瑞栄……………(34)

比企の畑から・冬……………小宮山洋夫……………(42)

めんどくさくてもしんどくても遊び……………宮本 和典……………(46)

メディア文化黙示録―アニメの巻(一)……………山本 政人……………(53)

子どもの本から

五歳の少女が語るラップランドの物語……………美谷島いく子……………(60)

表紙絵／片柳 淳子

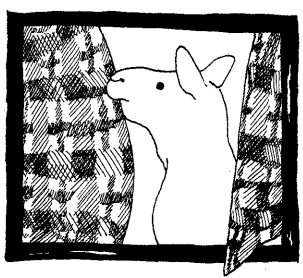
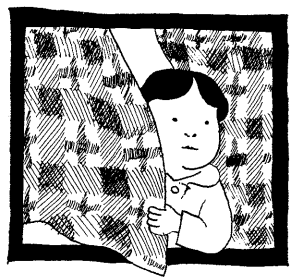
扉題字／津守 真

扉カット／第一巻第一号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ひらいた窓」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・榎田 正子

編集部／仲 明子





第一〇〇巻を迎えるにあたって

田代 和美

二十世紀の幕開けと同時に、本誌が一〇〇巻を迎えた。一月号始まりということ自体が、現代の雑誌としては稀であり、一〇〇年の歴史を物語ってもある。戦時下での休刊を除いて、一〇〇年間に亘って毎月毎月発行されてきた訳であるから、その長さともまたその重さに圧倒される。

雑誌を作る側としては、九十八巻あたりから、もうすぐ一〇〇巻を迎えることが気に懸かり始め、一〇〇巻になったら、何か一〇〇巻記念の企画を立てる必要があるの



だろうと思ってきた。ハレの日の気分で打ち上げ花火を上げるのだろうと漠然とそう思ってきた。しかしいざ実際に一〇〇巻を迎えてみると、これという特別なことができるわけでもなく、それまでと同じように毎月毎月の編集に追われている自分がいる。実際に迎えてみれば、この一〇〇巻は到達点ではなく、通過点にすぎないことを実感している所である。地道に地道に毎月作りあげていく。その結果として一〇〇巻に至った。それがこの雑誌なのだろう。派手さもなく、時代の流れを感じながらもそれに乗ってしまうこともなく、子どもの育ちを支える大人でありつづけることを願いながら、変わっていくものと共に変わらないものを見つめ続けてきたのである。

私は、たまたまこの一〇〇巻を迎えた時期に編集に携わっているという立場であり、しかも携わったのはこの五年間だけなので、一〇〇巻を迎えるにあたって何かを書くということに躊躇を覚えている。しかも倉橋主幹のように、一冊の雑誌をほとんど全部自分で書くことも一度ならずあった方と違い、たまに埋め草に雑文を書くくらいで、ひたすら皆様に原稿を依頼をしている立場である。そんな立場なので、一〇〇巻を迎えたことについても、ただただ、これまで本誌を作り続けてきた方々、そして読んでくださった方々への感謝の気持ちがあるのみである。

一〇〇年前というと、私の祖父母すら生まていなかった時代である。この間の年月を考えると、人間を取り巻く環境は大きく変わった。この数年をみてもあまりに激し



く私達の生活環境は変化している。今、巷ではIT革命なる言葉が大手を振って歩いている。子どもを取り巻く環境は、これまでも大人の生活環境の変化に伴って当然変化を遂げてきた。しかし大人と子どものボーダレス状態が進行しつつある現代では、大人の世界的変化の影響は、この先、予想以上に速いスピードで子どもの世界に及んでいくだろう。情報技術の進歩は、人の生活を便利にするだろうが、便利さの裏側で失われていくものやマイナスの影響に敏感でありたいと思う。情報にふれるという事だけをとっても、様々な実体験を積んだ上で情報に触れるのと、実体験のない子どもが情報にさらされるのでは、影響の大きさはかなり異なるだろう。現に大人の世界でも、例えば現代の子育ての難しさの要因には、必ずといってよいほど情報量の多さが挙げられる。これは実体験のない者が、情報にさらされることのマイナスの影響を端的に示している。子ども達を取り巻く環境の変化は、その影響を考慮したり、検討する間もなく、実態先行で進んでしまっている。しかし環境面で大人と子どものボーダレス化が進んでいるにしても、子どもは一足飛びに大人になるわけではない。二十一世紀の子ども達が人間としての基本的な部分を形成する幼児期をどのように過ごせるのかは、子どもの傍らにいる大人の大きな課題であるだろう。

情報が網の目のように張り巡らされ、瞬時のスピードで飛び交う時代の中で、この小さな雑誌にできることは、今述べた、この幼児期という時代が、人間としての基本



的な部分を形成する時代であるという、変わらないものをじっと見つめ続けていくことに他ならないであろう。刻々と変わりゆくものとの接点を考慮しながらも、変わらないものを見つめていく。それが、おそらくは、この小さな雑誌にできることであり、結局は、今まで本誌が貫いてきた方針と何ら変わりはない。

現在、少年を始めとする子ども達による犯罪や問題がクローズアップされ、少年法や教育基本法が改正されようとしている。しかし少年は一足飛びに少年になるわけではない。今は、大きな声で叫ばれてはいないもの、おそらくいずれこの先、年齢が降りてきて、乳幼児期の育ちに焦点が当たれる時代がやってくるだろう。そんな時に、子どもの傍らにいる人々が、近視眼的な時代のムードに流されることなく、人間としての基本的な部分を形成するという、幼児期ならではの幼児の当たり前前の生活を守っていく大人でありつづけられるように、少しでもそれを支えられる本誌でありたいと願う。

最後に、この場をお借りして、長期間、本誌を採算を度外視して出版し続けてくださったってきたフレールベル館に、心より感謝の念を捧げたい。

(お茶の水女子大学)

創刊一〇〇巻を記念して

私が『幼児の教育』誌の

編集にたずさわった頃

——一九五四年から一九八三年まで——

津守 真

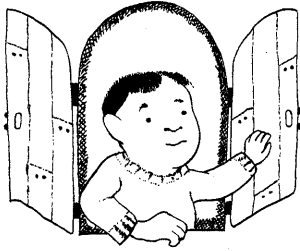
『幼児の教育』誌が第一〇〇巻を迎えることをまず
お祝いしたい。

一貫した編集方針

この機会に、私がこの雑誌の編集にかかわった頃
のことを少しく書かせて頂こうと思う。私が米国留

学から帰国して間もない昭和二十八年（一九五三）
十一月五日、私は倉橋惣三先生のお宅で行われた編
集会議に、当時お茶の水女子大学附属幼稚園園長
だった及川ふみ先生と一緒に出席した。周知のよう
に、倉橋惣三先生は明治四十三年頃より四十年間に
わたってこの雑誌の主幹をして来られた。この頃は

健康を害され、編集会議は中野千光前町のご自宅の、テーブルと椅子がおかれた二階の和室で行われていた。先生はいつもの和服姿で椅子に腰かけてゆつくりと話された。雑誌の編集は、いつも次の号の原稿依頼に追われるのが常であるが、このときは及川先生が倉橋先生にこの雑誌の編集方針をどう考えてこられたかを尋ねることから始まった。



伝えることを方針とすることはいつの時代も変わらない。とかく、現場の人は保育の技術面の材料を欲しがすが、この雑誌はその点で独自の立場をとってきたと倉橋先生は話された。いま、一〇〇年間のこの雑誌に目を通してみると、この点は一貫していることを誇ってよいと思う。それを可能にしたのは、お茶の水女子大学（東京女子高等師範学校）附属幼稚園が編集に当たったこと、この年月の大部分をフレール館が商売を超越して出版し続けられたこと、また、献身的に編集実務にたずさわる人々に恵まれたことによるのであって、世界的に見ても類がないのではなからうか。

あらためて言うまでもないことであるが、倉橋先生は戦前、戦中、戦後を通して、あるときは柔らか

い短文で、あるときはきりっとした論説によって、幼児教育の根本を示してこられた。この雑誌は、保育の現場の人達に、保育の根本を理解させ、その精神を

幼児教育の根本論というと、深遠な理論を連想するかもしれないが、幼児教育は生活に身近なものであって、読者にふわりとした感じを与える記事が必要であることが話題になった。文学的読み物もよいし、母親が分かる程度の講座も必要である。

倉橋先生は第五十一卷（昭和二十七年）より、巻頭言をヌースと名付けられていた。ヌースとは、ギリシャ語で理性という意味だと、はにかみながら先生は説明された。何かにとらわれて自由な判断を失っているときに正気にかえらせるのが理性（ヌース）の力である。戦時中の偏狭なナシヨナリズムの直後の時代だったから、先生はヌースの必要を多く感じておられたのだろう。人間的な理性が圧迫されるのは戦時中だけではない。閉ざされた社会ではどこにも起こることである。理性がはたらくのには寛容の精神の土壌を必要とする。これからの日本の社会が常に他者に対しても世界に対しても開かれつづけるように祈らずにいられない。

そのときの協力委員は、牛島義友、及川ふみ、斎藤文雄、多田鉄雄、波多野完治、山下俊郎の六名だった。専門的研究が重視される時代に入りつつあった。保育研究の促進のため、実際家、幼稚園専

門家、心理学者、教育学者等の協力による研究が求められていた。この雑誌が新しい保育研究の発表機関になるように今後特に熟考検討を要することがその時に話された。

幼稚園創設を一八七六年から数えると、一九五三年（昭和二十八年）は七十七年目になる。この間の日本の幼稚園の努力の跡を残しておくこともこの雑誌の仕事であろう。このときは、五十三卷二月号の編集の時期で、岡山の国富友次郎先生が逝去されたので、倉橋先生はその追悼文を自分が書くこうと言われた。あわせて従野静江、坂元彦太郎、岡 秀の諸先生が追悼を書かれることになった。いずれも当時の岡山保育界に縁の深い方々である。

昭和二十九年は、最初の幼稚園教育要領制定直前で、この号の特集として、「幼稚園にカリキュラムは必要か」という特集題を及川先生が提案され、和田実外数名の方々をお願いすることになった。和田

実先生は、東京女子高等師範学校の助教授で、明治四十一年から『幼児の教育』誌の編集にあたり、遊びによる新しい保育を提唱されていた。明治四十五年にご自分で目白幼稚園（現学校法人和田実学園東京教育専門学校）を開設された。倉橋先生はこのとき、久しぶりだからと和田実先生に自分で電話をされた。電話口で和田実先生の大きな声が聞こえた。翌年和田先生は亡くなった。

私は幼児教育の根本精神を繰り返し説くことがこの雑誌の使命と想っていたし、倉橋先生も同じ考えだった。最近の五十年間に、保母の名称が幼稚園教諭になり、保育士になったが、今後もこのことは変わらないだろう。このとき、倉橋先生は表紙の右上の「家庭、保育所、幼稚園」の文字に注意を喚起され、幼児の教育は幼稚園の中だけのことではないことを強調された。家庭、保育所、幼稚園に共通に、幼児を保育するという人間生活に欠くことのできな

い営みがある。このことは、むかしもいまも変わらないことであって、幼児はおとなから心をかけて保育されなければ人間になることができない。

倉橋先生は表紙の絵に特別にやかましかった。このときは、フレールベル館のキンダーブックの編集に長くかかわって来られた大塚さんが同席していて、第五十三巻は、猪熊弦一郎の「子供群像」と決まった。

第五十四巻一号には、倉橋先生に巻頭の文章をお願いしたが、自分はもう書けないからと、『幼稚園雑草』をもって来られ、「斯くてまた暮れ行く」という文章を指で示し、「新しき年を迎えるにあたって」という題をつけられた。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉のところをその一点にひきつける。それだけに、全局の関係を忘れさせ、前後の関係を失わせる。……（倉橋惣

三選集第二卷 p.281)。「私の幼児教育に関する考
えは三十年前も現在も根本的には変わっていない。
基本的真理は時代の変化にかかわらず真理である。」
と付け加えられた。

執筆者の所屬を文章の後ろに記すのは通例だが、
文章はその人に頼むのだから、所屬は記さないと先
生が言われたことも忘れることができない。

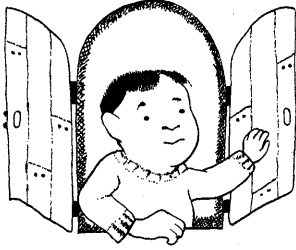
昭和三十年四月二十一日、倉橋先生は亡くなられ
た。第五十四卷六号、七号を、私共は先生の追悼号
とした。

創刊時の編集者、東基吉先生のこと

この雑誌の第五十卷(昭和二十六年)十一号に東
基吉が書いた、「婦人と子ども(幼児の教育の前身)
創刊当時のことも其頃の幼稚園の状況に就い
て」が掲載されているが、東基吉のことはあまり知
られていないので、この機会にその生涯とこの雑誌

とのかかわりについて紹介したい。昭和三十二年
秋、私は先生を大阪の池田にお訪ねした。和服姿の
先生と奥様はご自宅の門の前まで出迎えてくださっ
た。顎髭をはやした眼鏡の奥に先生の温顔があっ
た。ちょうど歌集『皐月歌集 惜春』(一燈園出版
部、昭和三十二年)を出版されたところで、そのな
かにご自分のことを記されている。東基吉は明治五
年和歌山県新宮近くの請川村の生まれで、父須川利
貞治、母フジの第三子として生まれた。生後半年の
ときに母親が世を去り、継母に育てられたが、五歳
のとき二度目の母も亡くなり、七歳のときに父も亡
くなった。それでも短い期間父から受けた愛育の嬉
しかったことは忘れられないという。兄と姉があ
り、早く両親に別れた子だということで、可愛がら
れ、父の没後も楽しい月日を送ったという。父が亡
くなって二年後に長兄も死に、基吉は東家の養子に
なった。熊野川の氾濫もあり、極めて貧しい生活

だったが、可愛い盛りの子どもだったので随分可愛がられたという。高等小学二年（いまの小学校六年）のときから新宮市居住の宣教師、ゼ・ビ・ヘール博士夫妻並びに婦人宣教師ミス・レビットに接して英語を学び、親しくその指導を受けられた。子どもながらもさらに英語に熟達しているという評判がひろまり、小学校の先生や巡査たちに英語を教えて謝金をもらったという。明治二十三年に和歌山県師範学校に入学してその以後の生活は順調で、新宮小学校の



訓導を一年勤めて後、明治二十八年四月に高等師範学校に入学、明治三十二年卒業後、岩手県師範学校主事となり、明治三十三年に東京女子高等師範学校教授

として附属幼稚園批評係となった。先生の言葉によれば、「内は当時なおフレーベル主義の保育法を固守する人達を相手に闘い、外では幼稚園不要もしくは有害論を強調する人達に対し、或いは雑誌に或いは講演に幼稚園保育新論を発表していたが、結局附属幼稚園に持論を発表する機関紙の必要を感じたので、附属幼稚園にあったフレーベル会を利用してその会から『婦人と子ども』という雑誌を発行することになり」と述べている（臯月歌集 p.126）。

創刊第一号には、「幼児教育法につきて」と題する文章がある。「幼児教育の根本主義というものは子供の自由活动にあることは、フレーベル氏の言葉でござりまして……子供の自然に従って教育することとは今までの教育者のすべての口にした言葉であり、……教えるというよりも、むしろ子供の自由活动を導いていく、これが即ち幼児教育の精神である」と書かれている。一九〇一年（明治三十四年）

という早い時代に、米国の進歩主義教育論をもとに、幼児の教育は遊びを中心に行われることを主張していることに驚かされる。少年時代から米国人宣教師から直接に英語を学んでいたことと関係があるだろう。

『婦人と子ども』創刊のころのことを、この時私はいろいろと伺ったが、穏やかに笑う先生の傍らで、奥様の方が当時のことを多く話してくださった。初期のこの雑誌には東くめ夫人の文章が毎号見られる。くめ夫人は東京音楽学校の出身で、幼稚園唱歌を作られた方である。滝廉太郎と音楽学校で同級で、東くめ作詞滝廉太郎作曲の歌がいくつもあることを私はそのときはじめて知った。夫人は誇らしげにそのことを語られた。「もう幾つねるとお正月」「今日の稽古もすみました」「鳩ばっば」など、幼児に親しまれた歌がいくつもある。明治の時代に、夫婦で幼児教育の雑誌の編集にたずさわられたのも

随分近代的である。

東基吉先生は明治四十一年に東京女子高等師範学校を去り、宮崎、栃木、三重、大阪府池田の府県師範学校校長をへて、池田に住まわれた。

歌集の中には、戦中戦後の歌が多く、先生は老年期にも血のたぎる思いの多い時代を生きたことが分かる。「サイパンの玉砕またも伝わりて報道さくさへ物うかりけり」「国たみのかまどの煙朝な夕なたえだえにして細り行くらし」「戦いは脱兎の如く始めしが処女の如くに終はりを告げぬ」「アジア人を人と思はでや英米は水爆実験絶へ間なく行ふ」など。

私がお会いした翌年、昭和三十三年四月二十日、八十七歳で家族の方々に愛されつつ生涯を終えられた。家族によって「追悼」という小冊子が編まれている。先生は和歌山県の南端に生れ、苦勞して勉強されたが、東京女子高等師範学校でこの雑誌を創刊

し、現代にも通じる新しい幼児教育を一〇〇年前に提唱されたことを思うと不思議な感に打たれる。

『幼児の教育』誌は教育基本法と

どのようにかかわってきたか

一〇〇巻を迎えようとしているいま、教育基本法の改正がなされようとしている。私の時代には『幼児の教育』誌は、保育の質の向上を第一に考えてきたが、教育の根幹にかかわる政治の問題を保育者はどうに考えたらいいか。

この雑誌の主幹を長くつとめた倉橋惣三は、第二次世界大戦直後、昭和二十二年、教育刷新委員会委員として、南原繁、城戸幡太郎、森戸辰男、務台理作らとともに教育基本法及び学校教育法の制定にかかわったことは周知の通りである。この先輩たちは、戦時中の国家主義教育の苦しい体験から、真の文化国家日本の教育の土台を築くために、文字通り

心血を注いでこれに当たられた。倉橋惣三は『幼児の教育』第四十六巻（昭和二十二年）五号より八号まで、四回にわたって詳細に解説している。教育基本法第一条（教育の目的）には、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として……」とある。完成とは最終段階だけをいうのではなく、そこに至るどの時点の「いま」をとっても、完成への可能性をはらんでいる。幼児期は人格はまだできあがっていないが、最も人間的であり、道徳的にみれば不完全であっても人間性は実に溢れこぼれるほど豊かであると、倉橋は幼児教育の基本を説いている。教育刷新委員会の委員を終えられてからは、先生は公的な仕事からは身を引いておられた。

私が編集にたずさわって間もない昭和三十年、第五十四巻十一号に掲載した、お茶の水女子大学附属幼稚園「教育実際指導研究会」での蟬山政道の講演

「ベスタロッチの政治思想」は、この点に関してとくに私の印象に残っているので、これを紹介して今後の政治と教育を考える一助としたい。蠟山政道は政治学者として知られているが、このときお茶の水女子大学学長だった。彼は、政治と教育とは本来、機能を異にしており、互いに尊重し合い助け合う関係にあることをはっきりと述べる。政治は権力であり、外形的、制度的、一般画一的であるのに対して、教育は人格と人格との個別的な交渉を中心とし、抽象でなく、具体であると言う。しかるに教育が量的発達をすると、制度が問題となり、政治の対象となり、政治によって支配される事態が起こる。政治は教育を普及させることはできても、内面にまで立ち入ることはできず、その限界を知らねばならないと言う。彼の論は明快である。教育、したがって保育は、制度がどのようなものになっても、人格と人格の直接的な関係がその主題である点はかわらない。

それを可能にするのが制度、あるいは政治であるう。

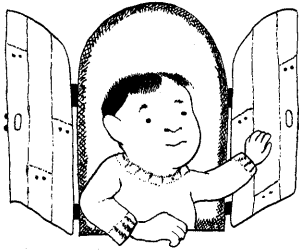
社会が調和を保って穏やかに動いているときにはこの考えでよいが、変化の時代にはそうはゆかないと蠟山は言う。世の中には明治の帝国憲法、教育勅語から、戦後の新憲法、教育基本法へと変わり、民主主義の社会になった。その方向で進めばよいが、そうはゆかないときに問題が生じる。

「しかるに最近になって、こうした教育の方針に動揺を与えるような政治的な傾向が生まれてきた。

……憲法を改めようとする運動がおこっておる。そうすると教育はせっかく新しい方針をもったと思われるのに、また変わってくるのか。そういうような政治の動きは、とうてい教育的に見て好ましいものとは考えられない。……そうなるかと教育者は進んで政治の世界にも入り込んで行く必要があるのではないかとというような疑問が生じてくる。」と蠟山は言

う。昭和三十年（一九五五年）当時に、すでに改憲、教育基本法改正という政治の動きがあった。敗戦という国全体を巻き込んだ大きな体験をしたにもかかわらず、五十年を経てもその動きが底辺に絶えなかったのが日本の社会であることを考えさせられる。

ここまで考えてきたときに、教育は政治とどのような関係に立つのかを問わざるを得ない。蠟山は、教育は政治や社会に対してもっと主体的な態度がと



れるのではないかと
言う。教育者は国の
方針を消極的、受動的に受け取るだけではないはずだ。そもそも政治や社会が時代によって変化するのは当たり前で、教

育がそのような変化するものによりどこを求めること自体に問題があるのではないかと蠟山は論じる。そして彼は、ハンス・バルトの『ペスタロッチの政治哲学』を紹介して「再生と自立」に言及する。簡単に言えば、再生とは人間の心の深くにある始原状態（ルソーのいう自然よりもっと人の心の奥にある人間的性情）を再び生きたことである。教育の実践はそれである。それを失ったとき人間も社会も墮落して、革命と危機（現代においては、社会崩壊と危機と言ってもよい）が起こる。民主的理念を織り込んだ政治的自立（自由、平等、博愛、権利）は再生の概念と切り離せない。私はペスタロッチの研究者ではないが、幼児保育の研究者としては納得できる考えである。現代日本のさまざまな子どもの問題は、人間の始原状態、あるいは、幼児のもっている人間的性情をたいせつにしないとところから生じた問題なのではないかと思う。

蠟山は「しからば、われわれがペスタロッチの政治思想の中から何を学ぶかと言えば、結局そうした政治思想そのものではない……ペスタロッチ自身の行動と実践においてその思想が実践されたというこゝとである」と結ぶ。

これからの日本が戦前のあやまちを再び繰り返さないためにはどうすればよいか。

子どもが日々幸せに生きる保育実践をすること、実践者が言語力をつけて主体的に発言すること、それが民主社会を作り上げる力になるのではないか。

これから

これ以後の『幼児の教育』誌について述べると際限がなくなるのでこれで止めよう。子どもは身体と感性を使って遊ぶことを何よりも喜び、社会の中で民主的精神を実現する力をもっている。この五十年間に『幼児の教育』誌に掲載された数多くの幼児保

育者の実践がそのことを証している。この雑誌は第一〇〇巻を迎え、二十一世紀になる。技術革新はこれからますます進むだろう。技術革新の時代には、自然とふれる人間の感覚をそれだけ一層重視しなければ人間性が危い。このときに、人間性の始源である幼児期をたいせつに育てること、またそれを支える文化をつくることは一層重要である。幼児が幸せでないような世界平和もまた考えられないだろう。二十一世紀にも『幼児の教育』誌が子どもの幸せとともに歩みつづけることを祈りたい。



“共に生きる”とらららら

榊田 正子

幼稚園で

このところ、園児のお母さんたちと話をしている時に、「十七、八歳になった時にキレない子どもにするには、どうしたらいいですか」という質問を受けることがよくある。子どもの発達に関することや親子関係その他色々な内容を含むかなり大きな問題であると思われるが、いとも簡単に、まるで何かのQ&Aのような雰囲気で問われることも少くない。

十代の少年たちが関与する痛ましい事件が次々と起こり、それらについて様々な立場の人が色々なことを述べ、あふれるほどの情報が目からも耳からも入ってくる昨今であるから、若いお母さんたちの不安はわからないわけではない。私として教育の現場に身を置く者として、このような社会の現況を重くま

たいたたまれない思いで受けとめざるを得ない日々である。

しかしながらと言うべきか、だからこそと言うべきか、先のような問いの中に時として、「こういう場合にはこういうやり方をすれば……」というように子どもの育ちを操作の対象のように見る見方や、あるいは特効薬を予防接種して安心を確保しようとするようなニュアンスが見え隠れすることがあり、そんな時には思わず「ちょっと待って」と質問を制することになってしまふ。というのも、あらゆる体験の中で育ちつつある子どもを目前にしているお母さんたちであるからこそ、日々の生活を子どもと向き合って共に生きる中で、新たに見えてくるもの、生まれてくるものに心を留め、それらを積み重ね考えていくような子育ての姿勢にもっと目を向けてほしいと願うからである。

だがそう願いながらも、こういうことをどうしたらお母さんたちにわかってもらえるのか……これが思いの外難しくして——折にふれ言葉では伝えてみるのだが表現の拙さもあり



——頭を抱えてしまうのもまた現実なのである。

保育の場において、保育実践に生気を与え、それを意義あるものとしていくための大きな要素が、一人一人の子どもとしっかり向き合って共に生活を創り生きていくこととする保育者の姿勢であろうと考えている。教師としての、またその幼稚園としての教育理念を基盤に持ちながら、目の前にいる子どもと状況を共有し、子どもの思いに寄り添いつつそこに教師の専門性を生かし、自らの主体性をもってかかわることを通して子どもの育ちを支えようとする姿勢である。

現実には、保育の場の状況は様々で予想がつくことではないし、常に物事の一部始終が見えているわけでもなく、また、子どもの表面に現れた行動ばかりが目立って、その内面で何を体験しているのか、何を求めているのか伝わってこないことも多い。しかし、保育者はいつでも具体的方策をあらかじめ携えて個々の状況に臨まねばならない、ということではなく、保育者としての専門性をもって子どもと向きあったその関係の中に生まれるものに、もっと配慮したいと思うのである。このことは、理念のない行き当たりばつたりの保育というものでは決してない。

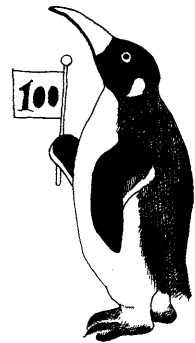
こうして関係の中で生活を組み立て、新たな状況へ向かっていく営みを、この稿で私は、「共に生きる」と表現したのである。

旅先で

前述のような問題意識を持ちつつ今年の夏、アフリカのカメルーンでボランティアとして働いている夫を訪ねた。私にとってこの国は、三年前の夏に続いて二度目の訪問である。

資源や産業が乏しく現金収入が殆ど無いために、町から少し離れると電気も水道も引けない家が多いという。この貧しい国の人々の生活の様子は、三年前と殆ど変わっていないように見えた。パソコンにしても携帯電話にしても、あつという間に国中に普及する我が国の事情とは大ちがいである。前回の訪問では、初めてということもあってこの国の人々の生活の様子が興味深く残るものだったが、今回の印象は、全くちがうところにあった。経済状況にしても生活様式にしても数年間の単位では全くといってよいほど変化のない状況にいる人間と、我が国のように変化のめまぐるしい状況にいる人間が、この地球環境を共有して同時にそれぞれ生きているという現実が、今回は実感として私の心を強く捉えたのである。

そして、夫と同様にボランティアとしてこの国に来て働いている人たちの話や活動の様子にも、頷けるものがあつた。彼らは途上国を援助するにあたって多くの技術や知識やプ



ログラムを持つている人たちであるから、当初はそれらを生かして効果的な活動を考えていたようである。しかし実際にこの国の状況の中で活動を始めてみると、様々なズレや壁にぶつかり、悩み苦しみながら見出した道が、この国の人と一緒に働くことを通して充分に彼らの思いを聴き、そこに自らが差し出せるものを考え、実現できることから進めていくやり方、すなわち「共に生きることを通して拓いてゆく」という道だったようである。

そこには当初の計画を大幅に遅らせなければならなかったり、方向変更を余儀なくされることも少なからずあったかもしれないが、それらは挫折というよりは、そこで本当に必要なもの、意味あるものへの創造の過程といえるような気がした。

また象徴的な体験もした。たまたま道で出逢った青年と歩きながら話をした時のことである。その青年が、自分の国はとにかく貧しい、学校に行くためのお金もなければ病院に行くお金もない、としきりに訴えるので、同行した友人が「お金がなくても心の豊かさがあるのではないか」と言ったところ、青年は全く理解に苦しむといった表情を見せたのである。友人も、言ってしまった後でその表現がその場には合わないおさまりの悪さを感じたようである。「お金がない」「貧しい」という言葉の後ろにある彼らの切実な叫びと、物にあふれる日本で心の荒みを痛感する我々が言わんとする意味とは、行きずりの会話などでは伝わりようもない隔たりがあるのであろう。そういうことこそ、「共に生きる」体験を通して互いに伝わり、そこに全く新しい何か——それが視点なのか発想なのかあるいは

生き方なのか全く想像はつかないが——が生まれる可能性があるのでないかと思われた。

再び保育の場で

様々な体験を経て、“共に生きる”ということは私の中でさらに幅広い問題意識となっている。幼稚園においては、保育者と子どもとの関係のみならず、保育者同志の連携的關係にこの視点を取り込むことも、より充実した実践への可能性を開くものとなる。また、家庭における親子の關係は初めに触れたところであるが、これについては理屈の理解ではなく、子育てのよろこびを体験することが目指す方向になるのであろう。このテーマをお母さんたちと共に考えていくことが、継続しつづある私の課題である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



江東区子ども家庭支援センターの周辺

新澤 誠治

「生みやすい、育てやすい街づくり」を目標に、東京の下町に「江東区子ども家庭支援センター」が公設民営の形で設立され、それから一年六カ月、地域の家庭に親しまれやすくと、通称「みずべ」として活動してきました。

この「みずべ」には、毎日、たくさん親子がつどい、所長として子ども、若いお母さん、お父

さんに出会い、それが子育ての最前線に立ち会っている感じで、親子の姿に接して学ばされたり、考えさせられたりして、毎日が発見の日々で、そんなことを少し報告させていただきます。

子育てひろば「みずべ」の紹介

かつては江東区は東洋のベニスと言われ、街の

中に運河がめぐらされていましたが、その名残りとして、隅田川の支流としての大横川があり、その水辺に区民館があり、その三階に子育てひろばとしてのセンターがあります。

四一三平米の床面積のところに、受付、事務所、ロビー、プレイルーム、グループ懇談会室、体験学習室、和室があり、火曜日から土曜日にかけて、午前十時から午後四時まで、毎日、七十組くらいの親子が来館して自由に過ごしています。

私たちには大きく二つの理念、目標があり、一つは「街の中の子育てひろば（共同体）」をめざし、①ふれあいひろば②学びあいのひろば③支えあいのひろば④分かちあいのひろば⑤育てあいのひろばと五つの柱を立てて活動をしています。

もう一つ、お母さんに「子育てを楽しく」という願いをもち、「子育てを一人で背負わないで、みんなで育てましょう」「困ったら助けて！」と

言いましょう」「完璧なお母さんを目指すのではなく、肩の力を抜きながら育てていきましょう」「お父さんも子育て参加を！」「お母さんが自分自身の時間ももち、一人の女性としての、自己発揮をしていきましょう」とメッセージを送っています。

ふれあいひろばで

午前十時から午後四時まで親子が自由に過ごすことができます。毎日、平均七十組位の親子が来館、子どもと親、子どもたちが、親同士が出会い、交わっています。そこにスタッフとボランティアが入り、子どもに話しかけたり、お母さんに子育ての楽しみ、悩みを聞いたり、またお母さん同士が友達になるようにつなぐ役割もしています。

そこでお母さんは「いままで部屋の中で子ども



▲プレイルームの風景

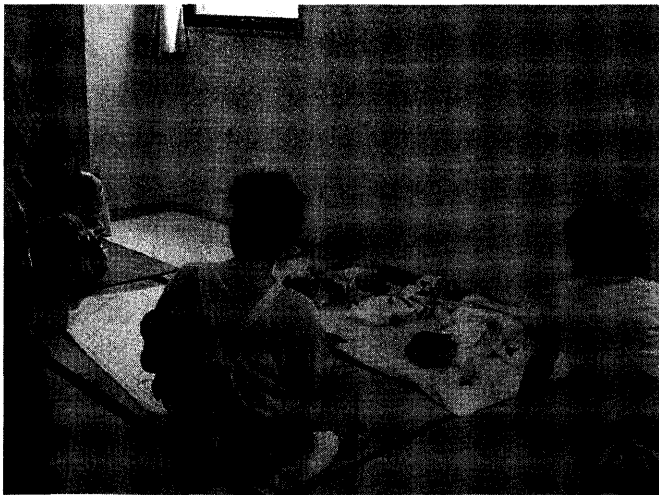
と向かい会い、誰とも話す機会がなかったので、愚痴を聞いてもらったり、お母さん同士で話すことができて、ほっとした、力を得た」と言います。都会の場合、地域の中で家庭は孤立し、お父さんの存在が薄く、母親一人に保育の責任が負わされて、密室の中で子どもと向かい合い、イライラしつつ育児する姿が浮かび上がります。

公園は地域の中の遊び場ですが、お母さんの中には「だれも居ない時をねらい、子どもを連れて行く」「お母さん同士の関係の中に入れないで、公園を一回りして帰る」という人もいます。お母さんたちの仲間の中に入れない人、砂場などで子ども同士でおもちゃの取り合いになったときに、相手の親のことが気になり、どう対応していいか迷い、それを避けて、公園には行かない人もいるのを知りました。

多くの人たちによる支え合いの中で

「みずべ」には、すでに子どもが大きくなった、子育ての先輩お母さんのボランティアが三十五人登録されています。ふれあいひろばの中に自然に入り、お母さんの話を聞いたり、赤ちゃんを抱いてもらったり、スポットタイムで子どもにお話しし、パネルシアターをしてくださる人もいます。めだかクラブと称して、手作り絵本、手作りおもちの指導をしてもらったりもしています。

街の中には子どもが好き、お話をしてあげたい、絵本を見せてあげたい、何か後輩のお母さんの力になれたらと願っている人がたくさんいることを知りました。六十歳を過ぎた人も、私は何にも技術を持っていないが赤ちゃんは好き、「お子さんを抱かして」と言っつて、毎日のように来てくださる人もいます。



▲和室（ボランティアさんと一緒に）



▲手づくり絵本

子どもの夜泣きに悩むお母さんに、ボランティアのお母さんが、「私も夜泣きに困ったときがあったけど、いつのまにか寝るようになったわ」「子どもはまだ、昼、夜がわからないから、少し付き合う気持ちでいなさいよ」「夜泣きをする子は賢い子になるといわれているよ」等と励ましています。

先輩のお母さんの話は、時には私たち保育者より励ましの効果があります。また赤ちゃんを抱く、オムツの交換、ミルクを飲ませる手伝いをする中で、育児の方法の見本を示してもらう結果になっていきます。こうして援助されたお母さんの中には、「子どもの手が離れたら今度はボランティアで働きます」と言われる人が何人もいます。

学びあいのひろばの中で

母親講座を昨年までは、毎月していましたが、

今年度から隔月にし、子育て塾、懇談会、年齢別グループ、悩み別グループなどお母さん同士が学びあうことを重視しています。十五人から二十人の小グループをつくり、そこにスタッフが入る、保育、臨床心理の研究者に入ってもらうなどして、三回から五回の連続の学習会をします。

「子どもを叱ることについて」「子どものけんか」「生活リズムを見直す」「絵本とテレビ」「がんばりちゃんとの付き合い方」などをテーマにして講師の基本的な話を聞きつつ、みんなで自由に話し合います。

料理のためのまな板がない家庭があったり、驚くこともありますが、でもお母さんの賢明さ、一生懸命さに目を見張り、今のお母さんはだめというが、こんなにすばらしいではないかと思うこともしばしばあります。

一つ例をあげると、「生活リズムを見直す」で、

東京成徳短大の今井和子先生から、「子どもたちに本来備わっている自然の生体リズムにできるだけそい、気持ちよく生活できることが大切です。三つの快（快食、快眠、快便）が健やかな体をつくり、情緒、心の安定につながっていく」という、子どものリズムの大切さが話されました。

その後に、お母さんたちは三日間の子どもの生活時間、生活リズムの流れを記入し、そこで気づいたことを話し合いました。そこでTV視聴の長さ、またTVをつけっぱなしにしていることに気づきます。これに対してTVをつけっぱなしにせずに終えたら消す、一日二時間程度内として見る等と話し合い、みんなで試みてみることにしました。すると「生活にメリハリがついてきた」「TVを消しても子どもはけっこう大丈夫だった」等と報告しあいました。

また、「外遊びが少なく、買い物の際に外に連



▲談話コーナー（エプロン姿がボランティア）

れて行き、それを遊びとかねていた」、これに対して「外遊びをたっぷりとるように試みた」、すると、子どもなりに〇〇したら「お外に行く」という、生活の流れの見通しがもてるようになってきた等と報告会。

こうした活動を通して、子守唄を唄わない、TV、ビデオに子守り、本、雑誌の情報による育児、そのために五感を通して子どもとふれあう育児に欠ける、お父さんが育児に参加しにくい状態など、お母さんの子育ての姿が見えてくると共に、お母さんの賢さ、子どもへの愛情の強さを感じて、教えられることが多くありました。

「子育てひろば」としての子育てセンター活動は、まだ緒についてはかりで、これから実践を重ねて、みんなで育てあう保育を創造していきたいと思っています。

（江東区子ども家庭支援センター）

目をこらして (10)



九月、虫取りに夢中な子どもたちがいた。

裏庭に行くと、いつもの虫取り仲間が集まって座り込んでいる。「どうしたの?」と聞くと「先生、もうちょっと早くくれば良かったのに。コオロギ逃げちゃったんだよ」と口をとがらせて言う。

プランターをどかしてやっと見つけたコオロギが、溝の中に入り込んでしまったのだという。溝には重いフタ(網状のもの)がしてあり手が届かない。子どもたちは残念そうに中に入ったコオロギを見つめていた。

「これはね、何とかなるのよ。重いから大人だけね」と言い私はフタを持ち上げた。

「え、はずせるの!」と驚きの子どもたち。これでコオロギに手が届く!

念願のコオロギを手中にし、私を見上げてまさしくんが言った。「先生、役に立つ!」

たぶん、これは最高の賛辞。

次の日もコオロギに夢中の子どもたち。コオロギも子どもたちの弱点を心得ていてすぐ溝に逃げ込む。





耳をすまして

さっそく私を呼びに来る。「よしきた」とフタを持ち上げる私。コオロギは上手に横、横と逃げていく。

「わかった。僕がフタ持つ。先生つかまえてよ」

私の持ち上げたフタを子どもが支え、その間にコオロギを素早くつかまえる。やったね、とうれしそうな声。

その数日後、「僕たち仕掛けするんだ」と言い、手にキュウリをにぎりしめ走っていく。

見に行くと、畑の真ん中にキュウリ入りのかごを埋め込んでいる。なかなかコオロギが見つからなくなったので考えたのだという。

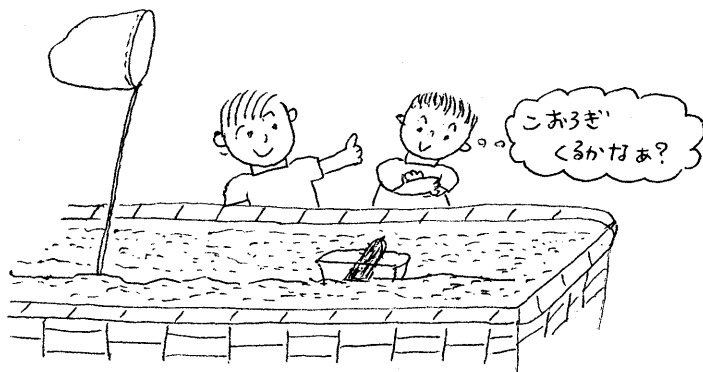
コオロギと子どもたちの攻防は、今日もまた繰り返されている。

*

この子どもたちの生活が始まって五ヶ月。遠慮なくものが言える関係になって、毎日がとても楽しい。

役に立ってるなあ、と実感しつつ今日も私はフタを持ち上げている。

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)



しかけのきゅうり

三歳児クラスの子どもたち

集団生活を始めたばかりの頃

……二〇〇〇年一学期の記録より

実松 瑞栄

はじめに

私に絵が描けるなら、『三歳児たち』という題の下に、『背中に小さな白い羽を持ち、透明な球にすっぽりと包まれた小さな子どもが、笑ったり泣いたり飛び跳ねたりしている絵』を描いてみたい。数年ぶりに三

歳児を受け持った時、私はそんな思いを持った。そして、目の前の一人一人に、まだ形にならない大きな柔軟性や可塑性を感じる一方で、彼等がしだいに自分なりの姿を形づくっていくのを支えるには、この子たちを取り巻く環境は、なんと騒々しく忙しく殺伐としていることかとの思いも持った。

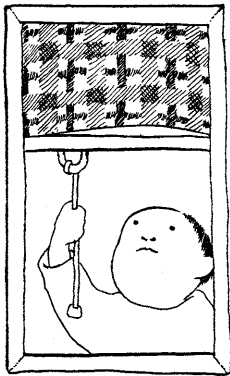
しかし、久し振りの新鮮さの中でこんなことを思いながらも、三歳児の子どもたちとの一学期の生活を振り返ると、担任の私もまた、子どもたちの柔らかな神経を痛めるような粗雑なかかわりをいろいろしてしまつたという思いがある。四・五歳児とは大きく違うことを感じながらも、つい、四・五歳児にかかわる時と同じような気持ちでかわつていたと思うことも多い。ここでは、そうした自分と子どもとの生活の断片のいくつかを振り返り、子どもの心の近くに寄り添うということについて思いを巡らしてみたい。

守つてあげられなくてごめん

(イ) 砂場の横に、繫げたり押したりして遊ぶ車型の砂場用具が籠に入れて置いてあった。T男は、その籠の中から一台ずつ車を出しては、側のテーブルの上に並べ、長く繫いで遊んでいた。そこへH男が来た。H男はT男の様子を面白そうに見て、自分も籠から車を

出し、T男がならべている反対側に繫ごうとした。ふと後ろを見てそれに気付いたT男は「うわーん」とびっくりするような大声で泣き出す。(五月九日)

(ロ) D男は、たくさんの友達が、砂場や、ウサギのいるサークルや三輪車などで遊んでいる庭にニコニコしながら出て行く。そして、ままごと用の食器が置いてあるところに行くと、そこから一枚の皿をとり、トコトコと歩いて、それを庭の真ん中あたりの平らなところに置く。そしてまた次の食器を取りに行くと、またトコトコと歩いてそれを前の皿の横に並べる。トコ



トコを繰り返して、皿が五、六個ならんだ頃、その側をK男たちが走って通り過ぎる。皿はK男たちの足に当たってグシヤグシヤになる。D男はそうなつた皿をびっくりしたように見つめる。D男の目から涙がポロポロ流れ出す。涙でいっぱいの顔のままD男は、母親が帰って行った門の方へ走り出す。(五月十二日)

*D男もT男も楽しそうに遊んでいる友達の側について、自分もまたしたいことを始めて遊ぶ。したいことがチャーンとあり自分で始められる。そして自分のしたいことに没入して遊んでいると、急に思いもかけず他の人がその遊びを壊してしまう。今まで家庭でこんな理不尽なことをされたことのない二人は仰天する。そして泣き、母親を求める。

*信頼しきっている周りに、裏切られたりかき乱されたりすることなく、ゆつくりと物に向き合い、自分の世界を広げながら遊ぶ姿を包み守ってあげたい。

それができなかつた時はせめて、驚き泣かねばならない心をしつかりと受け入れ抱き止めてあげたい。他の子への対応に忙しくはあったが、『こうして、大きくなるんだよ』『三歳児って可愛いな』と外側から見守る気持ちがあつたから、かけつけることが遅くなつたし、受け止めにも暖かさが足りなかつたんだと胸が痛む。

先生、気がつかないでいたんだね

(イ)よい天気でみんな外に出て遊ぶ。ふと保育室を覗くと、H子が一人でままとコーナーで遊んでいる。年長組に姉がいるH子は、この頃、登園するとすぐ姉のいるクラスに行き、そこで姉やその友達に遊んでもらい、降園時刻が近付くと送ってもらって保育室に帰って来ていた。そのH子が一人で三歳児組の保育室で遊んでいる。私は寂しくないかと思い、窓から覗いて「H子ちゃん」と声を掛ける。H子は私の方を

見るとニッコリ笑い、「これ見て」と言うようにテールブルが見えるように体をよじる。テールブルの上には四、五個の皿がならび、どの皿の上にも果物やおむすびやパンが一つずつのせてある。

その頃、そこでの他の子の遊び方は、そこにある食器や食物や衣装をあるだけみんな出して取り散らかすような遊び方だったので、H子の整然とした遊び方に驚く。

(五月一日)

(ロ) 例年、四月中旬ごろから、幼稚園の空にはこのぼりが泳ぎ、保育者はその下にカセットテープをもちだして、周りの子どもたちと「こいのぼり」や「竹の子体操」を踊って楽しむ。そして五月の連休前日の一日は、全園児を大きい園庭の方のこいのぼりの下に誘い、一緒に踊ったり空を見上げたりお菓子を食べたりにして過ごす。無理やり集めるわけではないが、保育者もみんな集まり、たくさんの友達と一緒に踊ったりすること、こどもの日を迎える喜びが盛り上がる一

日になればと考えてのことである。

今年も五月二日十時ごろ、「今日は、大きな庭で一緒に踊りましょう」という放送が流れる。三歳児も保育者が「行って見ようよ」と誘うとみんなついてくる。が、O子だけは保育室から出ない。大きな園庭の様子は三歳児組の保育室からは遠くて見えないので、一人で寂しくないかと何度か誘って見る。がO子はしっかり首を振る。気がかりだがO子だけ保育室において大きい園庭に行く。

そこで踊ったり、周囲にある遊具などで遊んだりして保育室に帰ると、O子がニッコリ迎えてくれる。保育室には、四、五個の椅子が並べられている。そしてその椅子の上には人形が一人ずつ、洋服を着せてもらって座ったり、バスタオルを掛けてもらって寝たり、膝にお皿を乗せていたりする。O子は一人ではなかった。たくさんの人形たちと遊んでいたのだ。

(五月二日)

* H子もO子も姉がいる。その姉にいつも遊んでもらっている二人は、保育室のままごとコーナーにある遊具で姉がするようなことをしてみたいと思っていたのだろう。でもいつもそこをたくさんの子が使う。その子たちは、そこにある物をみんな出して、

あたり中を取り散らかした状態にする。この二人がやってみたく遊び方ではない。おとなしくてわきまえのある二人は、自分の気持ちを保育者に訴えることもせず、他のところで他の遊びをしてすすす。そして、H子の方は、他の子がいない時にそつとそつと遊ぶ。O子の方は、やつとここで遊べることになった日に初めて、保育者に強く自分の願いを主張する。

この二人にわきまえがあることをいいことに、上に姉がいるから慣れているだろうと気を抜いていかかわりが鈍感であったなと思う。自由に遊ぶ毎日の中で、自分の思いをはっきり表出して遊べる子ば

かりが、したいことをして得をするような園生活に
ならないよう、おとなしかったり我慢したりする子
にもしっかりと目を注いでおかねばと自分を戒める。

心の育ちはゆつくりと

保育室の一隅のままごとコーナーで、A男・T男・N子・Y子の四人が、皿を並べたり、バスタオルを掛けて寝たり、絵本を見たり、引き出しから洋服を出したりなど、したいことをして遊んでいる。それぞれが勝手にしたいことをしているのに、四人がバラバラでなくなんだか一緒に遊んでいる気になっているらしい雰囲気があることと、それぞれの勝手をお互いに認めあつてぶつかり合うことなく遊びが続いている様子に「おや！」と思う。これまでも、毎日誰かがここで遊び始め、そこへ次々と遊びたいと思う子が入っていくという日々だったが、その場に人が集まるとじきに、物の取り合いが生じて掴み合いになったり、誰かが皿

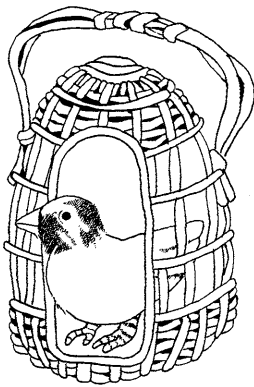
をならべると誰かがそれをひっくり返して大泣きになったり、誰かが気分に応じて物を投げ出しみんながそれを真似したりして、そこでの遊びはすぐに終わるという状態がいつものことだったからである。

それなのにこの日、このような遊びが続いているのは四人それぞれがお母さんなどの役になって遊んでいるからようだった。たぶん、上に小学生の姉がいてお家ごっこなどの仲間にいれてもらうこともあるだろうN子かY子のどちらかが、役になることを提案し、それを他の三人が受け入れることができ、そのことがとても嬉しくて、つながりを感じながら遊べることになったのであろう。

四人がそのように遊んでいるところに、戸外でひと遊びして満足した様子のU男が帰って来る。そして四人が楽しそうに遊んでいるところに入って遊ぼうとする。四人のなかのT男とはそれまでも時々かかわって遊んでいたから、T男と遊ぼうと思ったのかも知れな

い。ところが、A男が「だめ、来ちゃだめ」と強い口調で言う。いつもなら、そこは、いつでも誰でも遊んでいいところだったから「だめ」と言われても何のことも分からなかったらしいU男は、A男の言葉に関係なく遊ぼうとする。すると、四人が口々に「だめ」

「だめ」と言う。やっと拒否されたことに気づき、しかもその拒否をT男までがするのに出会ってU男はびっくりする。そして大声で「うわーん」と泣き出す。保育者には、その日初めて一緒に遊び、しかも役になって遊ぶなどという面白い遊びを思い付いた四人



の子どもたちが、そこに他の子を入れてあげる余裕などないことは分かる。それでも一応「一緒に遊びたいんだって。入れてあげられない？」と聞く。自己主張の強いA男がいつもの調子で「だめ、だめ」と強い口調で言い、他の三人も「だめ、だめよねー」などと言う。U男はいっそう大きな声で涙をポロポロ流しながら泣く。そこで保育者は「そうか、今日は四人で遊びたいんだって。U男君は先生と一緒に他のことをして遊ぼうか」と言う。しかし、U男は首を振って大声で泣き続ける。保育者は四人に「U男君の顔を見てごらん。とっても悲しいんだよ。今日だめだったら、明日遊ぼうねって言ってあげようよ」と言う。しかし、A男は、「だめだめ、明日も一緒に遊ぶんだから、ねー」と他の三人に言い、三人も「うん」と言う。U男はいつまでもいつまでも大声で泣き続ける。

(六月二十一日)

* 語彙の少ない子どもは、自分の思いに反することがあった時、すぐ「だめ」とか「いや」とか言う。そしてそれを言われた方は、否定されたり拒否されたりして、泣いたりあきらめたり怒ったりする。しかし、「だめ」「いや」と言う子の本当の気持ちは、全面否定ではなくいろいろな意味を持つことが多い。だから、「(今、途中だから)ちょっと待ってね」とか「(今日はこの人と遊ぶから)明日にしてね」というように、自分の気持ちを正確に言ったり、相手の気持ちを考えて優しい言葉で言えるように手助けしようと思っている。ここでも、「だめ」と言われたU男の気持ちに気付けるように、そしてU男に対する思いやりの言葉が掛けられるようにとかかわったつもりだった。しかし、これは間違っていた、こんな表面的な言葉だけの問題ではなかったと、後で思う。A男たちのここでの気持ちは、こんな楽しい遊びができているここへ、誰も来て欲しくない、遊

びを壊されたくないという必死の「だめ」であり、「明日もまたこうして四人で遊ぶんだ」という嬉しい嬉しい思いであったのだろう。だから、「明日遊ぼうね」などと嘘は言えなかったのだろう。一方、U男の方は、入れてもらって一緒に遊べなかったことよりも、だめだと言われたことが悲しくて悲しくて許せなくて、しばらくは泣き続けなければ気持ちが出まらなかつたのだろう。

ここでの私はその両者の気持ちを分かり認め、そして、U男の悲しい気持ちをしっかりと抱きとめることしかできなかったのだと思う。

保育者が、子どもの気持ちに気付かなかつたりそれを大切にしなかつたりして、子どもが、自分の気持ちを先生に分かつてもらえた嬉しさを味わえないような毎日を送っていて、どうして人の気持ちに気がつき考えられる子になれるだろう。まだ三歳児に無理なことを求めてしまった。つい言動上のやさしさ

を求めてしまうけれども、心の育ちこそ大切なのにと反省する。

おわりに

子どもたちの生活に、「遊びの中で人間関係の打ち合いの体験をする機会がなくなってしまった」などと言われる。

今年の三歳児たちも、前述のような体験を出発として、打ち合いの体験をたくさん積み上げながら大きくなってほしい。しかし、その時に、「先生が自分の心の痛みの側に立ってくれなかつた」という思いを小さい時から持つようなことにならないようにしなければと思う。そうした思いを持つ子が、大きくなって問題を起こした子どもの中に何人もいるという。心したいと思う。

(山口大学教育学部附属幼稚園)

比企の畑から・冬

小宮山 洋夫



ブロッコリーの花

冬の畑は、さびしい。

野菜の大半は、寒気をやりすぎすために、身を縮めている。雑草は、少しでも多くの陽を浴びようと、葉を地にひれ伏すように、ロゼット状に、広がっている。冬の雑草はまた、強い霜から、野菜の根を守る役割を果しているのである。

冬の畑では、種まきはない。農作業といわれる

ものも、ほとんどない。畑仲間に出会うことも、めっきり少なくなる。

冬の畑は、落ち着きがある。畑を訪れるのは、専ら、収穫と鑑賞、それに孤独を楽しむためだ。

冬の畑の住民は、ハクサイ、ミズナ、アブラナ、ブロッコリー、キャベツなどの、葉物野菜

に、ニンジン、ダイコンなどの根菜類、それに、ネギに、タマネギ。夏野菜とちがって、どれも、おだやかな表情をしている。

冬を通して、わが家の食卓で歓迎されるのは、ブロッコリー、ミズナ。ブロッコリーは、まず、株の頂点に大きな花蕾を一つつける。これを、切り取ると、下の葉腋から、花枝が伸びて、中型の花蕾を数個つける。これも収穫利用しているうちに、さらに、小形の花蕾が無数に育つ。どの大きさのものも、おいしい。小粒のものには、さわやかな味わいがある。次から次へと摘み取り、翌春まで、食べつづける。

ある日、小形の花蕾を切り取るところを、眺めていた、M氏は笑いだした。

「そこまで食べれば、ブロッコリーも本望でしょう」

ブロッコリーは、カリフラワーとともに、キャ

ベツの仲間。原種はケールで、ヨーロッパの西海岸に自生しているという。ヨーロッパ起源の作物は貧相の印象が強いが、キャベツ類は、ヨーロッパの風土と人為がもたらした、傑作といつてよい。

京都生まれの、キョウナとも呼ばれるミズナは水菜、文字通り、水を好む。京都では、ウネ間に、水を引いて育てるところが、この台地の畑でもかなりの大株に育つ。毎年、広い面積に植えつけるから、たくさん採れる。春めいて来るところになると、「もう、あきあき」という声が聞こえるようになる。

昨年はダイコンもたくさんつくった。食べても、食べても、人にかけても、畑に群れをなして、育つ。多少の霜に当たっても、外葉を枯らすだけで、根は腐らない。それでも、二月の厳寒期

に入り、強い霜に何回も見舞われると、凍障害を受ける。それを防ぐには、根元に土をたっぷり寄せることだ。

冬は、新年度の畑について、あれこれと、考える時期である。

今年は、何か、新しい野菜を育ててみようか。

ウネの幅は、このままで、いいだろうか。

トマトは、今年も、購入苗と、種まきの二本立てにしよう。

草の生えやすいところは、カボチャをつくつて、雑草を抑えよう。

ジャガイモ畑は、どの程度の広さにしようか。

久しぶりに、マクワウリを育ててみよう。

収穫に追われるオクラは、今年も休む。

そうだ、今年も畑に、落ち葉を入れよう。

鳩山には、雑木林が多い。林床には、

落ち葉が、堆積している。それに、多量

のドングリも。落ち

葉は、ゴミ捨て用の

大きなビニール袋に

ギユウギユウ詰め、

自転車に乗せ、畑に運ぶ。

ドングリを落とす樹木は、大半はコナラ、それに、若干のクヌギが入りまじる。

「久しく、ドングリを食べていないなあ」

シイの実や、マテバシイの実とちがって、コナラやクヌギ、カシワなどのドングリは、アクが強く、そのままでは食べられない。アカガシ、アラカシなどカシ類のドングリも同様だ。それで、灰を入れ、ボイルして、アクを抜かなければならな



ロゼットのナズナ

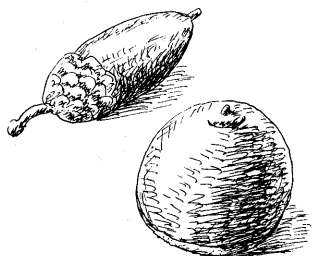
い。

以前、灰の代わりに、重曹の利用を思いつき、アク抜きに成功した。その時は、アク抜きしたドングリをつぶし、片栗粉を少量加え、団子にして食べた。甘味をつければ、シコシコしておいしく味わえる。

「よし、この秋は、ドングリを拾って、団子をつくろう」

ふと、「採集は、栽培よりも、尊い」という想いが、脳裏をよぎる。

ルソーは、いつている。人類のもつとも幸



コナラ(左)とクヌギ(右)の実

せな黄金時代、人々は、カシワの木の下で、ドングリを食べて生活していたと。古代ローマのウェルギリウス、さらに古代ギリシアのヘシオドスも、そのように夢想していた。

畑に二、三箇所、浅い穴を掘り、落ち葉を入れ、風で散らないよう、その上を、半ば堆肥化したメヒシバ、エノコログサなどの夏草でおおい、ほつとする。

(家庭菜園研究家)

カット 筆者

めんどじいさんおんぼろもどんどんども遊び

宮本 和典

見える方がオモシロイ

「今日ビビッたでー、だつてオレの前でおばあちゃん泣きだすねんもん」「えー、うちの前でもどっかのおばちゃんハンカチもってふいててんでー」
二〇〇〇年八月二十八日大阪市東住吉区の駒川まつりでの太鼓演奏後の子どもらの会話より。

ドンドコドコンコドンドンドン、ヤー！ うちの

(学童) クラブで和太鼓に取り組みはじめて今年で十年。ずっと子どもらの心と身体を捉えて止まない。今では年に数回、地域の保育所や商店街のおまつり、区の成人式などで演奏活動を行っている。

きっかけとなったのは、たまたま僕が和太鼓に興味をもち、習いに行つたこと。あんまりオモシロイし気分爽快だし、身体的にも快なので、ある時、クラブの子ども達に、「やってみたいヤツ」と誘い

かけたのが直接のきっかけ。五、六人の子どもが「やりたーい」と声をあげてくれた。

が……、太鼓がナイ。太鼓屋さんに電話して聞いてみると……「えっ、そんなに高いんですか……」。それから古道具めぐりをはじめた。四天王寺さんの市にも行ってみるが、ちよつと手に届きそうにない。保護者会の折に、そのことを話した。「はよいや。うちに一台あんのに、それ使いいや」「ほんまですかー」。一尺四寸の太鼓が手に入った。さつそく自分の習いたての「祇園太鼓」を、近所の長居公園でたいた。「しんどいけどオモロイわー」その時の子どもらの声。

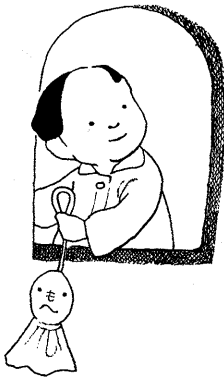
太鼓に参加しなかった子どもらは、遊びながらもチラチラと、太鼓の練習をしている子どもらが気になりだした様子。「やってみるかー」。一回目のお誘いには、「いらんわー」必ず遠慮がちに言葉を返してくる。やりたそうな気持ちは丸見え。未知のモノ

だけど、いつも一緒に遊んでる仲間が、ナニやらオモロそうにやってみるのを見ると気にならないはずがない。

二年目、こちらの方から子ども達に誘いをかけて「おまえらやってみいひんかー」「やりたい」。

ということ、自分がオモロイと思つてやりはじめたことが、子どもらの取り組みとなつていった。

和太鼓＝楽器ということから、学校での教科で分類すると「音楽」ということになりそうなんだけど、これはどう思い直してみても、「体育」だと断言できる。肉体を駆使するむちゃくちゃしんどい行



為なのです。五分も太鼓をたたくと「ハーハー」息があがります。打ち終わったあととまちがいなく筋肉痛になるんです。だから必ず事前に三十分くらいかけてゆっくりと体をほぐす体操をしてからたたく行為にうつるんです。これだけで十分しんどいことなのに子どもらは頑張っちゃう。「さあやろかー」必死になってたたきだす子どもら。何がイイって、その顔がメチャイイんです。学校でもあんまり光れへんやつ、クラブでもそんなにそんなにハリきった生活してへんやつまでもが、真剣な顔つきにどんどんなってくる。額に汗をにじませながら、どんどんカッコイイ顔に変わってくる。やればやる程に際立ってくる。思わずその顔に見入ってしまい魅せられる。ふと現実には立ち直つてみると、あんなにしんどいことをものすごく一生懸命にやっている子どもたちに感銘をうける。

自分がオモシロクてやりだした和太鼓だけけれど

も、子どもら在必死になってやっている姿を見てる方がずっとオモシロクなってきた。

太鼓のかくれた魅力

この太鼓の活動、一年中毎日やってるわけじゃもちろんない。基本的には、春から夏にかけて週に一回か二回の取り組みである。

ある時、子どもらのこの和太鼓の取り組みを見ていた父母が、「是非とも発表の場を、でないともつたいたい。それに子どもらも、もっと励みがでるだろう」と、地域のお祭りへの出演の話をもつてきた。ここで大うけ。子どもらも、緊張感をもって事に挑む快感を知った。話が話呼んで毎年、年に多い時で十回くらい演奏する機会を得ている。

どこへ行つても必ず人を泣かしてしまう。おじいちゃん、おばあちゃんに限らず、若い人も「鳥肌立ちました」などと感動してくれる。

地域の商店街のお祭りの時、中学生くらいのオシヤレした女の子たちが通りすがりに立ち止り、真剣な顔で子どもたちの演奏に見入っていた。二、三年前の話だけど、長居公園で太鼓の練習をしていると、二時間程じっと見ていたホームレスのおっちゃん、十五本の缶ジュースをもって「先生これ子どもたちに飲ましたって」と差し入れしてくれたことがあった。

子どもらの太鼓を聴いて、「自分もやりたい」と言う人はたくさんいる。まずお母ちゃん達、お母さん、ライオンズクラブのおっちゃん、音楽教師 e t c. いちばんハリキるのはお母ちゃん、えらいパワーでガンガンやって筋肉痛。音楽教師はすぐリズムをおたまじゃくしを用いてメモをとる。保母さん達はとても素直な感じ。一番理屈のいらんのがおっちゃん達。「オー難しいのう」で終らせるが練習後に一杯やりながら今日の練習の話が盛り上る。



▲ドンドコドコンコドンドンドン、ヤー!

去年の暮、ルミアスというショッピングモールでのイベントがあった。この一年間のステージ出演者（約一〇〇チーム）の中から十チームが出て年間グランプリを決める「ルミアス大賞決定戦」というもの。わが「かぶと組」（対外的な演奏活動をする時のステージネーム）もその中に選ばれた。ロックありゴスペルありダンスあり、と異ジャンルの闘い、太鼓をたたいて勝負するというのは初めての体験。

「兄ブー（私の呼び名）賞金とか出るのん？」「でるみたいやでー」「もし優勝したらみんなでハワイ行けるかナー」「じやろなー」子どもらは意気盛んで担当の方から進行表を頂いた。一ページ目をめくってみると、「優勝賞金五〇〇〇〇〇円」「うん！」子どもらの控室へ走って行ってページをめくる。途端「よっしゃー」叫ぶ子ども達。いつも以上の気合が伝わってくる。さあ時間、六階から一階へ向うエレベーターの中で「うりゃー」と叫ぶ子ども達。もの

すごくイイ出来。ひよっとしたら……。

「それでは発表です」「三位は……」「よかったー」心臓ドキドキ座りこんで体をかかえる子ども。「二位の発表です」チラリと司会の方が子どもらの方を見る。ドキッ。「オレらかー、二位かよー」「さて、二位は……です」。ギョエツ！……オレら優勝か……緊張はピークに達した。「それではグランプリの発表です。グランプリは……〇〇です」。

ガクーみゝんなその場に倒れてしまった。涙ぐむ子どもらを励ます言葉は何もなかった。僕もこの時本気でガッカリした。しかし、これだけドキドキしたり、おもいっきり落ち込んだりの経験ができたというのが貴重な体験だった。

遊びでなくちゃ

見ている側もたたく側もがこちよく素直に「ええなー、やりたいー」と思えるのは、何でなのか。

時々ふり返って考えるのですが、それはまず第一に
“和太鼓” そのものもつ魅力があると思うので
す。そして、第二には、これが大事なことだと思う
のですが、“遊び” だということです。

① リズムにのって身体動かすのが楽しい

② できなかった技を習得した時の快感

③ 曲として組みあがっていくプロセスのワクワク感

④ 複数の人間が寄りあい互に力を発揮することに

よって得られる楽しみの増幅

ほらね、こうやって書いてみると、“遊び” を定
義してみたいでしょ。

ビー玉するにしてもコマ回しするにしても、ドッ
ジボールするにしてもそうだけど、技術の向上なく
してはオモシロさは開拓されていかない。ファミコ
ンもそうかも。技術レベルが上がってくると、とて
も楽しい。太鼓も、複数であったり単数であったり
する他人のリズムの上ののっかって、自分のリズム



▲ルミアス ステージの“かぶと組”

をラッピングさせていく。少々遊んだりしながら……。こんなふうになるとほんとうにオモロイ。かつ、演奏会なんかで観てくれている人と一体になってその都度生まれてくる空気を感じるのがまたオモシロイ。

このオモシロさを知った子ども達は、「またやろうや」ということになる。しかしこのオモシロさを味わうためには、時間もかかるし努力もいる。

先に述べたように太鼓をたたくということは、とてもしんどいことだ。せつかくこんなにしんどいことをさせるのだから絶対子どもには、オモシロさを味わってほしい。そのためには時としてキビシイ練習も必要なのです。しかし最近、僕の方は楽になってきた。OB達に言わずと甘くなったのだそうだが、十年もやっていると、必ず年下の子ども達は、上の子どもらを見ている。そこに「あこがれ」が生まれる。僕もあこがれることがありますよ。だって素

直にカッコイイもん。

だから最近では、盛りたてでなくとも、スタート時点から子どもらのボルテージは高い。こういう意味において、異年齢の子どもが一緒に生活するというのはとてもイイ事だと思います

そして、そんなに急いでうまくならなくてもいいというのも大切なことだと思います。ひと月やそこらでは、太鼓はとりあえずたたけるようになるけど、オモシロさの域には到達しない。課題じゃなく、ちよつとめんどくさくつてもしんどくても「遊び」でなくちゃ。子どもらはよく言うでしょ。遊んでる最中に……「○○ちゃんあそびなやー!」。そうあれ。遊ぶのは真剣なんです。

(大阪・東田辺かぶとむしクラブ)

メディア文化黙示録

―アニメメの巻(一)―

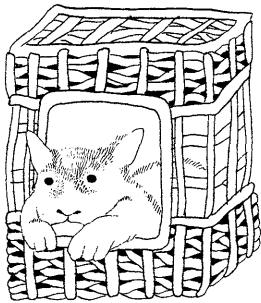
山本 政人

心理学という視座からだとは、どうしても「刺激や情報が主体に及ぼす影響」というテーマ設定になってしまう。これは重要な問題だが、実験にせよ調査にせよ、検証の方法に自ずから限界があつて、「影響」なるものをとらえきれない。あきらめたわけではないのだが、テーマを変えてみる。メディアを通して供給される刺激・情報がいかなるものであるか。さしあたりこれを検討することにする。それが及ぼす影響についても言及することになると思われるが、それは単なる推測の域にとどまる。

今回はテレビアニメを取り上げる。現在テレビ放映されているものを中心とし、過去に放映されたものを含む。例によって、アニメと一言でいっても多種多様で、どのような切り取り方をするかがまず大問題である。たとえば、「子ども向け」と「若者・大人向け」の違いが明確ではないが、ありそうである。「子ども向け」の代表は「ドラえもん」「ポケémon」「トモンスター」「クレヨンしんちゃん」あたりか。「若者・大人向け」は「サクラ大戦」「ラブひな」などだろうか。では「サザエさん」はどちらなのか。やはり明確に分けることは無理なようである。しかし放映するテレビ局の立場に立ってみると、この問題は簡単に解決できる。すなわち放映時間帯を考えてみればわかりやすい。午後六時から午後七時のアニメは子ども・大人、つまり「ファミリー向け」である。午後十時以降、深夜に放映されているものは当然のことながら子どもが視聴することを考えていない。明らかに「若者・大人」向けである。ここで気づくのは、アニメは「子ども向け」と「若者・大人向け」に分類するよりも、「ファミリー向け」と「若者・大人向け」に分類する方が妥当だということである。このことが意味するのは、かつて子ども向けに作られていたアニメは、現在は子どもだけでなく親も含めた家族、あるいは年齢不詳であるが若者向けに作られているということである。これは放映時間帯だけでなく、アニメそのものを見ればより明らかで、午後六時台放映のものでも、子ども向けとは思えないものが見受けられる。



もう一つ注意すべきなのは、アニメ番組を提供するスポンサーの目的である。スポンサーは自社の商品を宣伝するため、番組の途中にコマースナルを挿入するが、アニメ番組の場合、アニメそのものが宣伝であることが少なくない。アニメそのものを収録したレーザーディスクとかゲームソフトはもとより、アニメに登場するメカの模型や登場キャラクターを模写したカードなどが発売され、それがブームになったりしている。かつて「ガンブラ（ガンダムのプラモデル）」がそうだったが、最近では「ポケモンカード」「遊戯王カード」などのカードがブームになっている。それらは大人が知らないうちに子どもたちの中でブームとなり、親も巻き込んでパニック状態となることがある。かつてガンブラを求める子どもたちがデパートに殺到し、エスカレーターで将棋倒しになったことがあったが、記憶に新しいところでは「限定販売」のカードを求めて全国から親子連れが殺到し、警察が出動する騒ぎとなった。たかがプラモデル、たかがカードなのだが、ブランド品に殺到するのと同じ心理なのだろうか、子どもも大人も血眼になってそれらの商品を手に入れようとする。いわゆる「レアもの」はプレミアアがついて法外な価格で売られているが、もちろん買う人がいるわけである。宣伝されている商品がどのような消費



者層をターゲットにしているかを見れば、自ずとそのアニメが対象としている層がわかる。

対象年齢と番組の目的という二つの軸で現在放映されているテレビアニメを分類すると次のようになる。ファミリー向けでキャラクターやメカを商品化し、その宣伝を目的としているもの。おなじくファミリー向けでキャラクター商品の宣伝を直接目的としていないもの。若者・大人向けでキャラクター商品の宣伝を目的としているもの。若者・大人向けでキャラクター商品の宣伝を目的としていないものである。そしてキャラクター商品の宣伝を目的としていると思われるものはアニメ番組全体の中ではそれほど多くないが、宣伝を目的としていると思われるものはアニメ番組全体のなかではそれほど多くないが、宣伝を目的としないアニメ番組とは異なる特徴をもつ。まず当然のことながら番組の存続が商品の売れ行きに左右される。商品が売れ続ける限り番組は続き、逆に商品が売れなければ番組はストーリーに関係なく「スポンサーの都合により放映打ち切り」の憂き目を見る。そして商品宣伝を目的としているアニメはキャラクターやメカを目立たせることを最優先するため、ストーリーらしいストーリーがないとか、ストーリーが破綻しているといったことが起きる。商品になるキャラクターやメカが次から次へ登場してわけがわからなくなったり、毎回同じストーリー展開で登場するキャラクターだけが変わっていたりといった具合である。「ポケットモンスター」「遊戯王」などはおそらくこの類で、ストーリーにもそれなりの工夫はあるものの、キャラクター満載で、少なくとも大人が見ていて

ストーリーを楽しむものにはなっていない。本来、アニメにはストーリーがあり、それを楽しみに見ていたはずなのだが、商品の宣伝を露骨に前面に出したアニメではストーリーを楽しむことはできない。

しかし、アニメの「売り」はストーリーよりも「絵」かもしれない。「絵」を楽しむということからすれば、極端な話、ストーリーはどうでもいいという考え方もある。最近ではコンピュータグラフィックなどを駆使して、アニメの画質は高くなり、それを見ているだけでも楽しめる。そんななか、「サザエさん」や「ドラえもん」といった長寿番組が昔ながらの「絵」で楽しまれているのは、ストーリーがよくできているからにはかならない。ストーリーの質と画質は反比例するようにも思われるが、ストーリーも絵も駄目というアニメも少なくない。多くのアニメはどちらかというとこの類である。どこかすぐれたものをもつアニメは長く続く可能性が高い。しかしそれでも「スポンサーの都合により放送打ち切り」の運命から逃れることはできない。

肝心のアニメの内容について検討してみなければならない。これについてもどのような切り方をするかが問題だが、試しにアニメのテーマとなっているコンセプトを考えてみたい。コンセプトとして代表的なのは「友情・努力・勝利」といったフレーズである。「友情・努力・勝利」はかつて「週刊少年ジャンプ」に連載された漫画作品に共通するコンセプトだったとされている。作者がどこまでそれを意識して作品を作っていたかは不明だ

が、「ドラゴンボール」も「キン肉マン」も確かにそういうコンセプトをもっていったような感じを受ける。では最近のアニメ作品に見られるコンセプトは何か。無理を承知であえていえば、最近の若者・大人向けアニメによく見られるコンセプト

は「自己陶醉」である。これは「友情・努力・勝利」と比較してみると少しわかりやすい。最近のアニメにはこれらは出てこない。主人公は無条件で自分を受け入れてくれる人たちに囲まれ、努力はしなくても幸せになれる強運をもち、勝利ではないが自分だけが満足いく結果を得られる。少し具体例を挙げると、主人公は何の取り柄もない平凡な男の子（中学生〜大学生）というパターンがよくある。そこに突然どこからかいろんな髪の色（赤とか青とか緑）の女の子たちがやってきて、なぜか主人公はその子たちと一緒に暮らすことになる。そしてその女の子たちはなぜかみな主人公に好意を寄せ、次々と発生するトラブルも主人公は努力ではなく強運で乗り切り、それでいて何か大成功するわけではなく、ただ女の子たちとのにぎやかな生活が続くという、考えようによってはかなり「危ない」話である。これは「妄想」（「願望」といってもいいのだが、社会的に容認されない「願望」を「妄想」と表現しておく）の具現化である。フィクションには違いないが、「夢」があるなどとはいいい難く、それは現実には起こりえないというより、起きてはなら




ないことで、主人公はそのなかで自己陶醉に陥っているのである。

見ている側に及ぼす影響ということでは、「友情・努力・勝利」がコンセプトになっている漫画を読んだからといって、友情に厚く、努力や勝利を重んじるようになったわけではないから、「自己陶醉」をコンセプトとするアニメを見ていてそれに陥るわけではないと思われる。しかしその逆のことがないとはいえない。すなわち見る側が自己陶醉に陥りやすく、アニメはそれを映し出しているのではないかという懸念がある。ゲームやアニメの悪影響として現実と非現実の区別がつかなくなるといことがいわれているが、これは本来の意味での妄想である。多くの人間がより容易に陥りそうなのが「自己陶醉」である。理由もなく自分は他人に好かれる、努力してもしなくても人生なんとかなると思いつき、他人から見ると失敗でも自分は満足しているからそれでよしとする。このような人生観も一概に否定できず、ある意味たくましいのかもしれないが、反面困ったものでもある。見る側はこのような人生観をどのように受け止めているのだろうか。

どうもアニメのネガティブな面を強調してしまったきらいがあるが、別の面についても触れなければならない。それについては書くスペースが尽きてしまったので、次の機会としたい。

(学習院大学)



子どもの本から

五歳の少女が語るラップランドの物語

美谷島いく子

北欧児童文学には、しばしば、ラップランド人が、不思議な登場人物として出てくる。例えば、ノルウェーのドーレア夫妻著の絵本『オーラのたび』（一九三二）では、男の子オーラは、行商人に連れられて北へくくと旅を続け、ラップ人と出会う。スウェーデンのエルサ・ベスコフ作の絵本『ウツレと冬の森』（一九八一）では、スキーをはき森へ出かけた少年

ウツレは、冬王様の城でラップランドの小さな老人と子ども達が、クリスマスの贈物のスキー、スケート、橇を製作したり、編物や刺繍をしているのに出会う。フィンランドのサカリアス・トペリウス作の『星のひとみ』（一八六五）の主人公、瞳に星の光を宿し、すべてを見抜いてしまう女の子もラップランド人である。しかし、ラップランド人については、どんな生活を

しているのかわからず不思議のベールに包まれていた。

私は、そんな折、ラップランドに住むサーメ人（サーメ語を話す人々）の生活を、内側から描いた、この大型絵本『ゆきとトナカイのうた』に出会った。『リーベとおばあちゃん』『森からのプレゼント』の作品で知られる、ノルウェーの代表的作家ヨー・テン・フィヨールのノルウェー語が原典となったという。

ラップランドは、スカンジナビア半島の北からロシアのコラ半島にかけて広がる地方の呼び名で、ラップとは、サーメ語で「北の端」の意味という。ここに住むサーメ人は、総数約八万人の欧州で最古の少数民族である。北欧ゲルマン系の北欧人とは、人種も言語も違い、シベリアの方から西へ西へと移動してきたサモエド人（モンゴル系の人々）ではないかと言われ、独特の言語（サーメ語）と自然への畏敬の念と祈りの文化を持つ。戦前まで、文化融合政策がとられた為、サーメ人の言語や文化は弱体化した。この絵本は、貴

ゆきとトナカイのうた

ボディル・ハグブリンク 作・絵 山内清子 訳

ハグブリンク

ゆきとトナカイのうた

ベネッセ



11894・8288・4930-0 08798 9182061 定価1880円（本体1540円）

▲『ゆきとトナカイのうた』ボディル・ハグブリンク作・絵
山内清子訳 ベネッセコーポレーション 1990年

重なサーメの自然、風土、文化を、世界中の読者に伝える国際的絵本の傑作であり、幼児の多文化教育にも適した絵本である。

表紙の左下から、右手にストック、左手に犬の首紐を持ち、読者の方に向って滑ってくる白い民族衣装の少女が、この物語の主人公マリット・インガである。

スキーは、サーメ人がトナカイを追いかけて素早く移動する中で生まれた物で、四千五百年前の世界最古のスキーの壁画が残っているという。

この絵本の一番の魅力は、五歳の少女マリットの瑞々しい目、耳等五感を通して、サーメ人の素朴な生活が語られてゆく点である。

この絵本の扉は、晩夏の虹の高原に響き渡る「ホーホー ホーホー、ブルルーン、ワンワン」という音によって開かれる。トナカイを囲いの中に追い込む、マツチスおじさんの声と、父さんのオートバイの音と、犬の声。ラップランドの大自然の中での放牧生活を描くこの絵本の風景からは、マリットの耳がとら

えた様々な音が聞えてくる。

彼等は、苔を求めてトナカイを育てながら、蒲鉾型テントをはじめ、何でも自分で作り出さねばいけない。マリットはトナカイの印づけやトナカイや白樺から、プリミティブな物が形を成してゆく過程に、目を奪われて見つめている。

例えば、十二月になり、トナカイ一匹を殺すと、肉はもちろん、皮や内蔵、骨の髄まで捨てる所なく利用する。父さんは、臍すなの皮から靴を作り、母さんは、毛皮からズボンやタイツを、臄よは縫って、靴用の糸を作る。又、腸を洗い、レバーや血を詰めて、中味により違う名前のソーセージを作る。「冬のおうち」で一緒に住む祖母さんは、脳みそでパンケーキを焼いてくれる。

白樺からは、蒲鉾型テントの骨組みや、物置き台や薪を作る。祖父さんは、白樺の木をくり抜いて、人形の揺り籠「コムセ」を作ってくれる。マリットも、白樺の木で、トナカイの皮の裏打をしたり、白樺の皮

で、トナカイの皮の裏を擦り皮鞣なめしを手伝いながら、自分達で作り出してゆく生活をじっとみつめている。そうすることにより、厳しい自然の中で、自然を征服するのでなく、自然を友として暮らしてきたサーメ人の生活の基本的な知恵を学んでゆく。

トナカイはサーメ人にとって、単なる家畜ではなく特別の物である。驚くことには、子どもも誕生日のたびにトナカイをもらうので、マリットも年の数だけトナカイを所有しており、自分のトナカイ「シロ」や子犬のモステヤブチの成長を、心弾ませて見守っている。しかし、彼女は、作る、生まれる、育つという、すすくと、伸びやかな生活の中で、雪が早く降り融けた水が苔に凍りつくと、トナカイが全滅すること等、自然に対する畏れも知りながら育つ。

マリットは、星やオーロラを遊び友達のように親しくとらえ、時の巡りを、自然の移ろいや、陽差しの変化によって感じている。感動的なのは、ずっと心待ちにしていた初めての太陽が登る時、絵本の題名にもなっ

ている、「おひさまと雪とトナカイのうた」を犬のブチに歌って聞かせ喜ぶ、最後の場面である。極北の厳しい大自然の中での生活を描いたこの絵本は、幼児が生きることの基本とは何かを考えさせてくれる。

又、誰もいない広大な高原にトナカイの大群を追って移動するスピード感と、テント内の火を囲む濃密な空間での安定感との対比が、この絵本をめり張りのある楽しいものになっている。

この絵本の大部分は、現実には、陽光が差さない、厳寒の暗い世界のことである。しかし、白雪の中の、鮮かな赤青黄の民族衣装コップ、皆が教会に集ったクリスマス等、冬の方が明るく彩られていることに気づく。幼いマリットの心に映った幼年時代は、雪明りやランプの光の中で、家族に守られ安心した、明るくキラキラと光り輝いている世界として形象化されている。ラップランドの風と光の中で、健康な楽天性に満ちている。それは、自然から遠ざかってしまった私達が、失ってしまった輝きでもある。

(舞々同人)

編集後記

明けましておめでとうござい
す。

『幼児の教育』は今月号で第一〇〇巻
を迎えました。一九〇一年の創刊以
来、二十世紀と共に歩み続けてきた
本誌ですが、こんなにも長く続いて
きたのは、多くの執筆者や読者の
方々のご支援のおかげと感謝してお
ります。今後ともどうぞよろしくお
願い申しあげます。

*

今年には創刊一〇〇巻を記念して、
毎号、これまでの本誌にゆかりの
方々にご執筆いただく予定です。ま
た、四月号には、津守真、本田和
子、田代和美の三人の歴代主幹によ

る座談会も予定しております。その
ほかの企画も準備しておりますの
で、どうぞご期待ください。

今年には表紙絵を片柳淳子先生に、
カットは彌永たえ先生にお願いい
たしました。一年間、どうぞよろし
くお願いいたします。

表紙の右隅には創刊号の表紙を載
せました。当時の誌名は『婦人と子
ども』で、題字を東京女高師校長高
嶺秀夫、絵を同教官荒木十畝が描い
ています。これを編集した東基吉は
第五〇巻の記念号に、書いていま
す。「(絵は)何分渋くって地味で
パツとしないです。:(題字は)雑
誌の表題の文字として素人向きがし
ません。私も弱りました」。私はこ
れこそ本誌を代表する表紙であると思
っていましたので、これを読ん
で、大変驚きました。

(A)

幼児の教育

第一〇〇巻 第一号

(二〇〇一年一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十三年一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-21-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三-五三九五-五六三(営業)

☎〇三-五三九五-五六四(編集)

振替 〇〇一九〇-11-196400

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

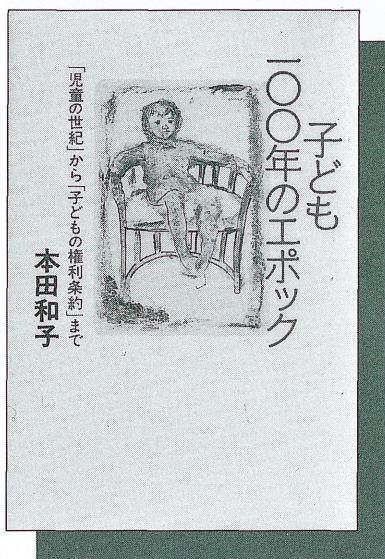
20世紀は子どもにとってどんな100年だったのか。
今世紀の総決算と21世紀の「子ども」を展望した保育者必読の書!!

子ども 100年のエポック

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで

好評発売中!!

*本書は
『幼児の教育』の連載を
もとに
まとめたものです。



【内容】

この100年間の「子ども観」「子ども一人一人関係」の変遷をたどりながら、20世紀の「子ども」を総括した一書です。

世紀の終焉期に頻発する子どもの不可解な事件や理解しがたい言動……これらが物語っていることは何なのか、そしてなぜいま私たちは「子ども」が見えなくなってしまうのか、保育の前提にある「子ども理解」を深めるのに役立ちます。

本田和子／著

四六判 280ページ 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレール館



保育実技シリーズ

最新刊!

⑤ 30分できる ふわふわ布おもちゃ

尾田芳子・小沼かおる・コッベ平沢・宮崎由美子／共著

主に3歳未満の子どもたちを対象にした簡単布おもちゃを紹介。やさしい手ざわり。安全でかわいらしく、たのしく遊べるものはかり。子どもの心に、豊かな感性と情緒を育むことでしょう。また少し時間はかかりますが、ごっこ遊びに役立つ小物やプレイマット等も掲載しています。

AB判・96頁・定価：本体2,200円+税



⑥ 30分できる わくわくカップシアター

阿部 恵／編著

身近にある様々な空き容器を利用して作るカップシアター。子どもの歌、世界のお話、日本の昔話等を題材に、脚本と、登場するキャラクターの作り方と型紙を紹介。誕生会をはじめとする園行事等で、子どもたちの関心をひきつけ、雰囲気盛り上げるための出し物がいっぱい。

AB判・96頁・定価：本体2,200円+税

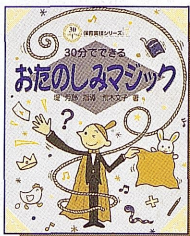


⑦ 30分できる おたのしみマジック

堤 芳郎(指導)／荒木文子(著)

身近なものを使ってカンタンにでき、子どもたちの目を引く不思議な手品や子どもと一緒に楽しめる手品、お話とマジックを組み合わせたマジックシアターなど、バリエーション豊かに紹介しています。子どもたちとのコミュニケーションがより広げられるよう配慮されています。

AB判・96頁・定価：本体2,200円+税



⑧ 30分できる うきうきコスチューム

島田明美／著

発表会などで、やりたい出し物は数あるけれど、そのコスチューム作りが大変という保育者のために、作品の実際例(王子さまとお姫さま、忍者からおばけ、様々な動物に変身できる口や耳、きれいな草花等)を数多く紹介し、その作り方と型紙をつけた。これで発表会は万全。

AB判・96頁・定価：本体2,200円+税



キンダーブックの
フレール館